

## 父子相互交渉における働きかけのスタイル<sup>(1)</sup>

上村佳世子・加須屋裕子\*・濱部浩一\*\*

### Abstract

The current study explored the conversational styles of father-child interaction. A father-child dyad was videotaped monthly during free play at their room. Discourse samples to be used in this study were collected when the child was 4;5 and 4;11. Analyses revealed that the child's syntactic and lexical abilities developed with age and that the child at 4;5 persistently returned to a topic he had brought up, while at 4;11 he was able to carry on a conversation his father initiated. The most common conversational style the father used was an "aggressive" mode which included short, direct, informal speech, followed by a "teasing" mode which provided a way to interact and to have fun while interacting when there was little information to share. Learning to participate in a context where the father's conversational styles were used required the child to learn complex social rules. The results suggest that father-child interaction of the type observed in this study fosters the development of communication skills which serve as a bridge from young children's in-circle ("uchi") interactions to their out-circle ("soto") interactions.

**Key Words** : father-child interaction, early childhood, conversational styles, discourse analysis

---

### Conversational Styles in Father-Child Dyadic Interaction

\* Kayoko Uemura・Hiroko Kasuya \*\* Hirokazu Hamabe (日本獣医畜産大学運動科学教室)

(1) 本研究の実施にあたり、平成10年度文京大学人間学部共同研究助成金の援助を受けた。

Correspondence Address : Department of Human Studies, Bunkyo Women's University,  
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533,  
Japan.

Accepted October 14, 1999.

Published December 20, 1999.

## はじめに

人間関係を作り上げる要因の1つに、相手との関係（上下、親疎）を認めることがあげられ、それに応じた言語形式（尊敬語、謙遜語などの使用）や行動（会釈、話し相手との距離間）を選択することが社会言語学的にみて必要であると言われている（井出，1992）。私たちは他人との日常の相互交渉のなかで、さまざまな形の言語選択、例えば、友人や兄弟との会話は口語体で、上司、教師へ向かっては文語体でというように、レジスターシフトをしている（Ervin-Tripp, 1973）。Gleason (1973) は、最も早いこの種のシフトには、見知らぬ人がいることによって幼児が口を開かなくなるという現象がみられることを報告している。さらに、幼児は4歳までに見知らぬ人に対して、より丁寧にはっきりと話すことを学び、自分の要求を受け入れてもらうためには母親に対してもことばのスタイルを変えることも明らかになっている（Gleason, 1975；Shatz & Gelman, 1973）。このようなレジスターシフトは、家庭内の会話の中にも当然存在し、親子間で使用される発話スタイルの特徴や親子関係の親密度は、共通の話題がどれほどあるか、また、その話題をどのように持続できるかなどに現れていると考えられる。父子間の会話の特徴を調べた研究では、父子では母子間会話に比べて会話数が少なく、ひとつひとつの発話も短いと報告されており、さらに会話が途切れた時には子どもがそれを回復することにあまり固執することはないという結果などから、コミュニケーションへの影響を述べている（Barton & Tomasello, 1994；Bellinger & Gleason, 1982；Gleason, 1975；Malone & Guy, 1982）。

親子間相互交渉のなかでの親の働きかけは、子どもの社会化を促進するという意味において子どもの言語発達とも深く関係し、とくに子どもはその状況、話題、目的などを考慮に入れて親の発話を理解し、それに続く会話を成立させるための社会言語学的スキルを習得している（Gumperz, 1982；Warren-Leubecker & Bohannon, 1989）。さらに、母親はたいていの場合、子どもの日常生活に一番近いところにいる人間である一方、父親は子どもとの共通話題を提案するという点では、子どもからはやや遠い存在である場合が多い。父親が日常的な話題で子どもとの会話が難しいとしたら、会話の運び方やレジスターシフトに特殊な現象があるのだろうか。もしあるとしたら、その特徴的な働きかけに子どもはどのように反応し、そこから何を学習しているのだろうか。

本研究では、父親を主たる養育者と、家族以外の他者との間にいるもう一人の養育者としてとらえ、父親の子どもとの距離の取り方、発話スタイルの種類と変化、さらにこれらの社会言語学的働きかけに対する子どもの受け取り方を、幼児期の2時点における父子相互交渉に基づいて描写し、このもう一人の養育者とのかかわりの重要性をウチ／ソトの観点から検討する。

## 方 法

### 被観察者

対象は、都内在住の4歳代の男児かずや（仮名）で、本研究の観察時2時点の年齢は、4歳5か月と4歳11か月であった。家族構成は両親と弟（3歳10か月歳下）の4人家族である。

### 観察方法

対象児の父親に、対象児が4歳5か月時より半年間にわたり、毎月1回（基本的には毎月第1日曜日）の頻度で午後7時前後より2時間VTR撮影を依頼した。対象者の家族の居間にVTRカメラを設置し、食事を含む家庭での活動時の家族の社会的相互交渉を記録した。カメラは録画状態にして居間の端の部屋全体を撮影できる場所に設置し、対象者の観察が不可能な状態になる場合（例えば、対象児が居間を5分以上離れる、眠るなど）以外は、2時間そのままにしてもらうよう依頼した。観察者は直接場面には参加せずに、VTR記録を通した間接的な観察をおこなった。

### 分析方法

VTR記録から、対象者の発話および非言語行動に関するトランスクリプトを作成した。トランスクリプトとVTR記録から、分析対象となる場面を選んだ。対象場面の選択基準は、2時間のVTR記録のなかで、第三の対象物を介して父子相互交渉が10分以上続き、両者共に発話のない時間が30秒以上続かない場面であること、さらに、父子のやりとりの特徴を明確にするために、母親が不在であることもその条件に加えた。この基準に基づいて、発話のまだない弟を含む家族3名の10分間のやりとりで、対象児が4歳5か月時には数絵本よみの場面を、4歳11か月時にはテレビゲーム攻略の場面をそれぞれ分析対象場面とした。

子どもの言語発達の指標としてMLU（Mean Length Utterance；平均発話長）と語彙数を算出した。日本語のMLUの算出方法には4種類あるが、その中から、自立語付属語MLU（小椋，1997）算出をした。それは、接頭、接尾、活用形についての付属語は形態素区切りとせず、自立語と自立語についての付属語を形態素区切りとするものである。その他に、1)音節の繰り返しなどの非流暢部分は数えない、2)1つの発話内における単語や節の繰り返しや、自己修正発話は、最も完全な形の語や節を1度だけ数える。3)擬声語、擬態語は、単独で使われた場合には、分析対象としないが、「フワフワってしてる」のように、文に組み込まれている時には語として数える、という基準を設けた。MLUは言語発達の最も盛んである幼児期前期から中期までを中心に英語発達指標として考案されたものであり、幼児期後期になるとその妥当性はかなり低くなると言われている（Brown, 1973）。日本語においても、MLUの指標が有効である年齢範囲が36か月ぐらいまでであろうという報告もある（栗山・星・蓮見・秦野・瀬戸，1997）。しかし、日本語のMLUについては、その整備がここ数年で始まったばかりで（綿巻，1997；栗

山・井上, 1997; Oshima-Takane & MacWhinney, 1995), これからの研究が期待される  
ところである。現在のところ, 他に幼児後期の言語測定により妥当性の高い指標もないことから,  
これを語彙数と併用して2時点の対象児の言語発達を比較した。語彙数としては, 異なり語数  
(Different Word Types) を採用した。これは, Lyons (1968) の open class と closed class  
による分類をおこない, 名詞, 動詞, 形容詞, 形容動詞の数のみを求めた。

父親の働きかけのスタイルの年齢による違いの特徴をみるために, 父親の対象児に対する発  
話を中心にした働きかけを Table 1 のように, 対時的, 受容的, からかい的, 教示的, その他  
という5つのカテゴリに分類した。

Table 1 父親の働きかけスタイルのカテゴリ

種類	内容	例
対時的	命令的・権威的働きかけ, 男性ことば, 無意図的無視など相手を幼児として意識 することのない, 対等な対応や権威的な 対応	「いつやるんだよ」, 「よく数えてみな」, 頭をこづいて行かせようとする
受容的	あやしことば, 幼児ことば, ほめるなど 相手を幼児として意識し, 受容的・接近 的対応	「いい子だね」, 「よしよし」, 抱いて頭を なでる
からかい的	からかう, わざと無視する・間違える, ふりをするなど相互の了解のもとに意図 のズレを作り出すような遊戯的対応	弟に向かって兄の名を呼ぶ, わざと聞こ えないふりをする
教示的	教示的働きかけ, 教室ことば, 教授・学 習的働きかけなど課題を介して何かを学 習させ, 評価・修正をおこなうといった 対応	「何匹いますか」, 「はい, それでは次 は?」
その他	上記以外の働きかけ	「うん」, 「わかんない」, 「たくやの手, 拭いてやって」

カテゴリのコーディングはすべて2名の評定者によっておこなわれ, その一致率は.835で,  $\kappa$   
値で.785であり, 高いレベルの一致率が得られた。評定者間の不一致が多かったのは, からか  
いを含むやりとりの最初の部分で, 乱暴な表現を用いたからかいことばを「対時的」と「から  
かい的」のいずれのカテゴリに入れるかという判断の違いによって生じたものと考えられる。  
不一致が生じた部分の最終的な結果は, 2名の評定結果の平均値を採用した。

10分間の父子のやりとりをそれぞれの話題毎に区切り, 誰がその会話を始め, その会話がど  
れだけ持続したかを調べた。さらに, 対象者の発話および非言語行動のトランスクリプトから,  
それぞれの話題や意思などの変化やその過程を微視的, 解釈的に分析した。やりとりの解釈に  
あたっては, 対象児の父親に面接調査をおこない, 当該場面で観察された発話や行動の内容お  
よび理由について, 資料分析に必要な情報を収集した。

## 結 果

### 子どもの言語発達

Table 2に、2時点における10分間の父子相互交渉のなかでの子どもの総有効発話数(擬態語、擬声語、本読み、秒読みなどを除いたもの)と自立語付属語 MLU が示されている。4歳5か月時よりも4歳11か月時のほうが MLU の数値が大きくなっており、統語的発達が認められるが、SD も大きくなっている。このことは、加齢とともに長い発話ができるようになるが、短い発話の出現も少なくないことを表している。

Table 2 子どもの発話の MLU と異なり語数

年齢	総発話数	MLU	SD	範囲	異なり語数	総語数	Type-token ratio
4;5	98	2.60	1.63	1-8	39	116	.34
4;11	90	3.39	2.61	1-15	47	106	.44

また、総出現語数は4歳11か月時にはやや少ないが、open class の語彙数を数えた異なり語数が逆に増えていることから、語彙が多様になっていることが示唆されている。Excerpt 1に見られるように、4歳5か月時は父親の発話(1-2)をそのまま繰り返したり(1-3)、自分の発話を何度も繰り返す(1-1, 1-5)ことがやりとり全体をとおして多く、Type-token 比率が低いことを示している。以上の2つの言語発達指標から、4歳5か月時から4歳11か月時の間で、対象児の言語発達がみられることが明らかとなった。

Excerpt 1 : かずやのことばの繰り返し (4歳5か月)

- |   |     |                                |
|---|-----|--------------------------------|
| 1 | かずや | : 4個だよ、よんこお! 4個だよ。4個。          |
| 2 | 父   | : よし。そしたら、今度かにさんは?             |
| 3 | かずや | : かに。                          |
| 4 | 父   | : はい。                          |
| 5 | かずや | : (手で数えて) 1, 2, 3, 4。4個だよ, 4個。 |
| 6 | 父   | : 4匹。                          |
| 7 | かずや | : (小さい声で) うん。                  |
| 8 | 父   | : はい, 終わり。                     |

### 父親の働きかけのスタイルと子どもの応答

10分間の父親の対象児に対する働きかけをカテゴリに基づいてコーディングをおこない、それを集計したものが Figure 1 である。異なる種類のスタイルの頻度という観点からみると、父

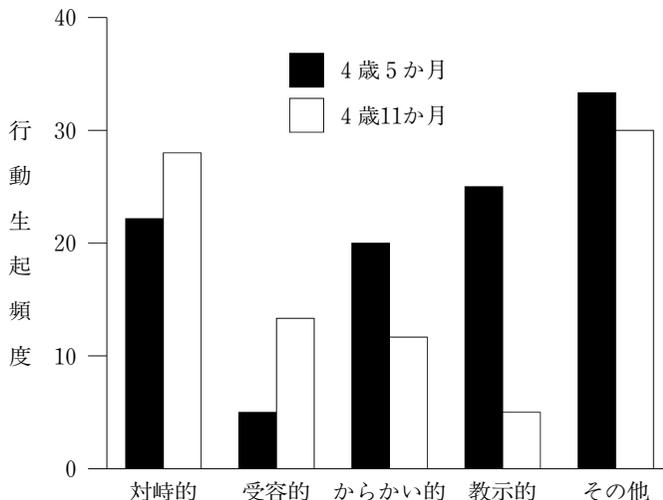


Figure 1 2時点における父親の働きかけスタイルの違い

親の働きかけの特徴は、2時点をとおして「対峙的働きかけ」の生起頻度が多かった。

これは Excerpt 2 に示したように、一般的に“男ことば”と呼ばれるようなことばを含む発話 (2-9) やことば尻の強い言い方 (2-11, 2-13), そうした発話と対応する行動的な働きかけ (2-15) などであり、子どもは父親のスタイルの変化に敏感に気づいて様子をうかがった (2-10) あとに、一時的に従順的な反応をしている (2-12, 2-14)。この他にこのカテゴリに含まれるものとしては、命令機能をもつ発話、無意図的な無視などがあり、これらはいずれも発話対象が幼児であることをあまり意識しない、親としての権威を示したり対等な意識を表すものである。また、父親はこのような働きかけに続いて、それを補足するするように子どもに接近するよう

Excerpt 2 : 父親の対峙的働きかけと子どもの話題の転換 (4歳5か月)

- 9 父 : かず。(かずやの方をみて) ゴルフいつやるんだよ?  
 10 かずや: (父の顔を見る)  
 11 父 : いつから始めるんだよ, ゴルフ?  
 12 かずや: あ, そうだった。  
 13 父 : あそうだったじゃないだろ! いつから始めるんだよ?  
 14 かずや: あ, はい (テレビのほうに向く)。  
 15 父 : ん? (軽くかずやの後頭部をたたく)  
 16 かずや: はい。  
 17 父 : (頭をなでて, 少し柔らかく) いつから始めるの?  
 18 かずや: んー, (本に手をやる) 僕これやるんだもん。  
 19 父 : よし。したら今度, みかんいくつだよ?  
 20 かずや: みかん, 数えたよ。

な柔らかいイントネーションや動作に変化させている(2-17)ことも特徴となっている。

働きかけのスタイルに関する面接調査で、父親が「相手になってやれる時間には、できるだけ多様なスタイルのことはや行動で働きかけることを念頭においており、とくに、母親とは異なる立場を意識した親としての権威を示したり、わざと乱暴に扱ったりじゃれあったりすることも含め、子どもと同等に遊んだりするようにしている」と述べているように、「対時的働きかけ」にはとくにこのような父親の意識が表れているものと考えられる。

「からかい的働きかけ」は、4歳11か月時よりも4歳5か月時に多く生起していることがわかる。からかい的な働きかけは、Excerpt 3のように、父親は子どもの発話を(3-21, 3-23)を聴いて内容を理解しながら、わざと眠ったふりをしたり(3-22, 3-24)、弟に應對したり(3-26)して、子どもへの応答を先延ばしにしている。子どもはそのような父親の意図を知らずとも、何度も要求を繰り返し(3-23, 3-25)、応答を引き出そうと大声を上げて抗議している(3-27)。このようなからかいを含む働きかけは父子のやりとり全体で何度か生起しており、話題の中心的流れからは逸れるものではあるが、それだけに相互に遊びの要素が強く、とくに父親はかなり明確に子どもに分かり易い表現でアプローチしていることが特徴と言える。

**Excerpt 3 :** 父親のからかい的働きかけ(4歳5か月)

- |    |      |                                   |
|----|------|-----------------------------------|
| 21 | かずや: | え、(本を指して)おにぎりの数だよ。                |
| 22 | 父    | : (わざといびきの音で)グー                   |
| 23 | かずや: | (父の耳先に顔を近づけ)おにぎりの数だよ。(＜)おにぎりの数だよ。 |
| 24 | 父    | : グー(首を振る)(＞)(かずやの顔を見る)           |
| 25 | かずや: | ×××、(本を指して)おぎにりの数だよ。おにぎり。         |
| 26 | 父    | : (わざと弟の方に向けて)たくちゃーん。             |
| 27 | かずや: | (ものすごく大きな声で叫んで)おにぎりのきゃーずだい。       |
| 28 | 父    | : (かずやの顔を見る)                      |

(＜) 次の発話と重なる

(＞) 前の発話と重なる

××× 聴取不能

このような「からかい的働きかけ」は、そのほとんどが父親主導で開始されており、4歳11か月時になると生起頻度が少し落ちるが、逆に子どもが主導権をもつからかいが観察された(Excerpt 4)。ここでは、「散髪を誰にしてもらったのか」という父親の問いに対して、わざと別の回答をするというかずやのからかい的な発話が見られた。発端となったのは、「散髪をしたのは父親である」ことを相互に知っていながらわざわざ問いを發した父親の発話であった(4-29)が、子どもは「母親、弟、自分」と父親以外の名前をわざと挙げ(4-30, 4-36)、「誰にやってもらった?」、「誰だれ。」という遊びのやりとりがしばらく続いた。4歳5か月時には父親のからかいをやっと受け止めていた子どもが、このようなコミュニケーション方略の取り方やタイミングを父子相互交渉のなかで十分に学習し、この時期になって逆にそれを父親に向けて

Excerpt 4 : 子どものからかい的働きかけ (4歳11か月)

- 29 父 : いてててそいでも、かわいいこれ、かわいいじょりじょりだれにしてもらったの。  
30 かずや : え、ママ。(父に抱きかかえられて体がよろけそうになりながらゲームする)  
31 父 : #え、誰にしてもらったんだよ誰にしてもらったんだよ (かずやの頬にキスをし  
ながら体を締め付ける)。  
32 かずや : (足をばたばたさせながらくすぐったように父の締め付けから逃れようとして  
あーうーあーうー)。  
33 父 : 誰にしてもらったんだよ、誰にしてもらったんだよ。  
34 かずや : すとっぴー。  
35 父 : この頭誰にやってもらったの。  
36 かずや : はい#、うんと、たーたん。  
37 父 : 0 (かずやを抱きかかえたまま頭をびしゃっとたたく)。

# ポーズ

0 応答なし

使用し、積極的にやりとりを展開している様子がみられた。

「教示的働きかけ」は、4歳5か月時と比較して4歳11か月時に減少していることがわかる。このような働きかけは、活動や話題の内容にも深くかかわることであり、4歳5か月時の数絵本よみの活動では、父親が一方向的に子どもに絵本を読ませてそれを修正したり評価したりするといったやりとりが繰り返されたため、教示的な働きかけが多く数えられたものと考えられる。しかし、このような活動は年齢と共に遊びの中では減少していくものと考えられ、4歳11か月時のゲーム攻略活動のなかでは、子どもが父親にやり方を教えることもあり、父子のやりとりがかなり対等におこなわれるようになってきていることが観察された。

#### 話題内容とその展開

Table 3 および Table 4 は、それぞれ2時点における父親と子どもが話題にした内容とその持続時間、その会話の開始者を示したものである。全体の流れはいずれも、14の種類の話題構成から成っていることがわかる。主題となるのは、それぞれ数絵本よみとテレビゲーム攻略であるが、10分間のやりとりのなかでも主題の他にいくつかの別の話題が導入されている。子どもと父親の話題が同じ場合が多いが、これが異なる場合には、それぞれの話題が会話のなかで並行して提示されていることを示している。

まず、4歳5か月時のやりとり全体をとおして特徴的なことは、主題となる数絵本よみは子どもによって開始され、そこから外れる話題はすべて父親から提出されていることである。Excerpt 2にもみられるように、子どもは話題が他に外れると、即座に会話内容を絵本よみに戻そうと父親に直接的に働きかけている(2-18)。このように、父親の話題を数絵本よみに戻したのは、すべて子ども側の働きかけがきっかけとなった。数絵本よみは子どもの要求で開始しており、父親が「遊んであげる」という形でそれにつき合うように活動が展開している。子どもの活動への執着は、子どもが話題を他からすぐにもとの話題に戻そうと働きかけるために、全体的に他の話題の持続時間が短いことにも表れている。

Table 3 4歳5か月時の数絵本よみ場面の話題とその持続時間

	子どもの話題	父親の話題	持続時間(秒)	会話の開始	引用例
1	数絵本よみ	数絵本よみ	52	子ども	
2	ストーブを切る	ストーブを切る	11	父親	
3	数絵本よみ	数絵本よみ	94	子ども	
4	ビールを飲む	ビールを飲む	26	父親	
5	数絵本よみ	数絵本よみ	18	子ども	
6	ティッシュ取って	ティッシュ取って	11	父親	
7	数絵本よみ	数絵本よみ	11	子ども	Excerpt 1
8	数絵本よみ	弟の相手	6	父親	
9	数絵本よみ	数絵本よみ	21	子ども	
10	数絵本よみ	気づかぬふり	45	父親	Excerpt 3
11	数絵本よみ	数絵本よみ	24	子ども	
12	テレビの内容	テレビの内容	34	父親	
13	ゴルフの開始	ゴルフの開始	14	父親	Excerpt 2
14	数絵本よみ	数絵本よみ	169	子ども	

Table 4 4歳11か月時のゲーム攻略場面の話題とその持続時間

	子どもの話題	父親の話題	持続時間(秒)	会話の開始	引用例
1	テレビゲーム	テレビゲーム	103	子ども	
2	テレビゲーム	上の空	23	子ども	Excerpt 5
3	テレビゲーム	テレビゲーム	47	子ども	
4	ティッシュ取って	ティッシュ取って	102	父親	
5	弟へのことばかけ	弟へのことばかけ	37	子ども	
6	テレビゲーム	テレビゲーム	68	子ども	
7	ヘアスタイル	ヘアスタイル	41	父親	
8	テレビゲーム	テレビゲーム	8	子ども	Excerpt 4
9	父への依頼	父への依頼	12	父親	
10	テレビゲーム	テレビゲーム	98	父親	
11	本よみ	テレビゲーム	37	子ども	
12	弟の世話	弟の世話	82	父親	
13	テレビゲーム	テレビゲーム	33	子ども	
14	名前の呼び違い	名前の呼び違い	18	父親	

**Excerpt 5** : 子どもの父親への要求と自己処理 (4歳11か月)

- |    |     |                               |
|----|-----|-------------------------------|
| 38 | かずや | : パパ?                         |
| 39 | 父   | : はい (隣の部屋で)。                 |
| 40 | かずや | : (ゲームをしながら) とらないで, 死んじゃおうかな? |
| 41 | 父   | : うん (自分のことに注意が向いている)。        |
| 42 | かずや | : とらないで, 死んじゃおうか#な?           |
| 43 | かずや | : やっぱ, とる。                    |

4歳11か月時になると、主題のテレビゲーム攻略から外れる話題が、子ども側から提示されることもあり (Table 4; 5 弟へのことばかけ)、また、父親がテレビゲームをしている間、別の対象に注意を向ける (Table 4; 11 本よみ) という逆のパターンも観察された。4歳5か月時と同様に、主題から逸れる話題を提示することが多いのは父親であるが、子どもはそれをすぐに主題に戻すことはせずに、しばらくは別の話題につき合うこともできるようになった。また、Excerpt 5に示されるように、父親が主題に対する働きかけにのってこなくても、無理をせずに間接的に要求しており (5-40, 5-42)、父親の応答が得られなくても (5-41) 問題を自己処理する (5-43) という自立的な対応が観察された。

このように、相手を自分のペースに引き込もうと直接的な要求を繰り返した4歳5か月時と比較すると、この時期になると相手の意図や状況をよみとってそれに合わせたり、相手に依存せずに処理ができるように変化していることがわかる。このような子どもの発達に伴って、父子のやりとりはかなり対等な形で展開される部分が増加しているものと考えられる。

## 考 察

本研究では、観察した2時点の父子相互交渉の比較から、子どもの言語発達とそれに伴う父親の働きかけの特徴に変化があることが認められた。まず、基本的な統語的発達という観点からは、MLUおよび異なり語数という2つの指標から、発話の長さや単語の多様性という面で、発話の表現能力が高くなっていることが明らかとなった。

このような子ども側の変化に対して、父親の子どもの活動への介入や要求への対応などに変化が示された。4歳5か月時では、やりとり全体の流れからみて会話の主題から逸れた話題の持続時間が短く、子どもの要求によってすぐに主題に戻っている様子がうかがえる。社会的相互交渉のなかでは、母親と比べると父親は主題を逸れた反応が多く、さらに子どもからのことばかけへの応答の比率が低いことが言われている (Mannle & Tomasello, 1987) が、この時期の父親はさまざまな話題や発話スタイルを導入しながらも、子どもの意思や要求に配慮し子どものペースで会話を展開させていることがわかる。結果的に数絵本よみという主題にそって

情報交換をもとにした、(本研究ではその他のカテゴリに入る)質疑応答や指示命令などが多く含まれる働きかけが多くなるものと考えられる。これは母子の会話についても多く報告されており(Brown, 1977; Clancy, 1986; Snow, 1977), おとなが子どもの世話をするということに共通する談話機能と考えられる。4歳11か月時になると、主題から逸れた反応は子どもからも観察され、また父親の逸脱を許容し、このような会話の持続時間も長くなっていることから、話題の選択や会話展開という点では父子の役割がかなり対等になっていることがうかがえる。

ここでの観察で特徴的にとらえられたのは、父親の「対時的働きかけ」の頻度の多さであった。ここには語尾における男性ことばの使用や命令的・権威的ことばかけ、無意図的無視やそれに類する行動などが含まれるもので、2時点をとおして父親の働きかけのスタイルのなかではもっとも頻度の高いものであった。とくにこの父親の場合、母親とは異なる働きかけのあり方を意識していることが面接調査からも明らかになっており、相手が幼児であってもそれに合わせることをあまり強く意識しない対等な、もしくは一方向的な働きかけである。これが顕著にみられるのは、父子の間だけにある「ゴルフの開始」などのような固有の話題や、父親の独り言に近い個人的な発言のなかであることを考えると、このような働きかけをとおして父子間に特別の関係性が形成されていると言えよう。

父親の働きかけに特徴的にみられたもうひとつが、「からかいた働きかけ」であった。からかいという行為は、もちろん母子間やその他のおとなと子どもとの相互交渉のなかにも多く観察されるコミュニケーション方略である。Eisenberg (1986)によれば、からかいはよく知っている人間関係のなかで生じる行為で、遊び的な要素と子どもの行動の統制という要素を含むもので、子ども自身が安全であると感じるコンテキストが前提となっている。本研究の父子のやりとりのなかでもからかわれていることが子どもに明確にわかるように、声の質を変えたり同じ語句を何度も繰り返したりする誇張した表現方法をとっている他、子どもの顔を見て笑いかけるなどのサインを送るなどの働きかけが観察された。それに対して子どもも大きな声を出して父親に抗議するが、それでも本当に怒ることはないし、父親に強く押さえつけられてからかわれても笑っており、これが父親との信頼関係の上に成り立つ遊びであることを十分に理解している。また、「からかいた働きかけ」を言語発達の観点からみると、内容的には複雑な語彙や文型は必要としないかなり単純な繰り返しから成っており、言語能力の面では幼い4歳5か月時にこうした働きかけが多くみられることもここから説明されよう。別の観点では、この父親の立場からみても日常生活のなかでの子どもとのやりとりから出てくる共通の話題を持ち出す必要がない分、簡単に子どもに接近できる方略とも考えられる。このように、お互いに意味を了解しながらわざと出来事を人為的に作り出していくという遊戯的なからかいは、参加者によってそれを意味づけるための交渉がおこなわれ、そこで形成された相互的了解は一体感を生み出すことが示唆されている(中野, 1995)。このような相互間の距離を縮める特有のパターンをもつ方略を、子どもはコミュニケーションの道具として父子相互交渉の経験のなかで十分に理解し、逆にそれを積極的に使用しているのである。

発話は、話し手の“声”としてその人格や意思を含むだけでなく、その発話が向けられた相手の声や場面状況など、複数の“声”によって構成されていると考えられる (Wertsch, 1991)。このような社会的相互交渉のなかでは、参加者の声が活動や状況によってダイナミックに変化し、それが参加者の発話や行動から顕著によみとれる。本研究における父親の働きかけスタイルの特徴からも、父親の意思や期待と同時に、場面状況が反映されている。さらに、そのスタイルは子どもの言語発達を含む社会化の過程とも対応している。子どもは、そのような多様なメッセージを含んだ父親の働きかけに接し、その場での応答が要求される。このような機会は、子どもが他者の意図や自分の立場をよみとる感性を養い、それに対処するためのさまざまなことば遣いや行動様式のレパートリーを広げるものと考えられる。

本研究の結果のなかで特徴的にみられた「からかい的働きかけ」と「対時的働きかけ」は、とくに主たる養育者とは異なる認識をもちながらソトの人間でもないという、父親の立場をよく表している。前者のからかいという行為は、話者の表現と真意の間のズレを伴う遊びのなかで獲得される社会言語学的スキルで、対人関係のひとつの形成方略ととらえられる。父親のこのような働きかけは、まさに信頼関係のなかで相手の意図をよみとり、新たな意味や一体感を形成していく機会を遊びをとおして提供している。子どもがこの働きかけの意味を理解していることは、父親への応答だけでなく、逆に子ども自身からこの方略を用いた働きかけが父親に向けて発せられていることからわかる。後者の対時的な働きかけのなかでは、父子相互がすでに共有している話題をとおして接近したり、対等でやや突き放した表現によってわざと距離をおくことが要請されている。これらはいずれも、コミュニケーションのなかで他者との関係を察し対処するために必要な手がかりとなる道具となるものである。

父親の多様な働きかけに対処することが要求されるこのような遊び場面は、子どもの社会化を促進するための重要な実践の場となっている。それはまた、対処の失敗や不足などが、許容されたり修正可能なウチの世界でのやりとりであると同時に、ソトの世界の見知らぬ人間と円滑に相互交渉をするのに必要なスキルを獲得し試用する場ともなる。このような働きかけは、一日の大半を一緒に過ごす主たる養育者との、もっと情緒的で親密な人間関係のなかではむしろ経験しにくい。もう一人の養育者という立場にいるからこそ、ウチとソトの世界のはしご掛けをする機会を子どもに提供できるものと考えられる。父親のソトの世界の導入は、Gleason (1975) の Bridge Hypothesis を説明した Mannle & Tomasello (1987) の記述にもみることができる。父親は、主たる養育者と見知らぬ他者との間の立場にあり、他者とのコミュニケーションのための準備機能を果たすというのである。本研究で観察された父子相互交渉のなかでも、子どもは複数の働きかけのスタイルに接し、そこから父親の意図や状況を判断して、自らの働きかけにそうしたスタイルを適用していく過程がみられた。これは、ウチの世界での経験がソトの世界で適切なことばや行動様式を選択していく下地になることを示唆している。今後、さらにこのような父子相互交渉における働きかけスタイルの変化を拡張し縦断的に見ていきたい。

文 献

- Barton, M.E., & Tomasello, M. (1994). The rest of the family: The role of fathers and siblings in early language development. In C. Gallaway & B.J. Richards (Eds.), *Input and interaction in language acquisition* (pp.109-134). Cambridge : Cambridge University Press.
- Bellinger, D., & Gleason, J.B. (1982). Sex differences in parental directives to young children. *Journal of Sex Roles*, 8, 123-129.
- Brown, R. (1973). *A first language: The early stages*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Brown, R. (1977). Introduction. In C. Snow & C. Ferguson (Eds.), *Talking to children : Language input and acquisition* (pp.1-27). Cambridge : Cambridge University Press.
- Clancy, P. (1986). The acquisition of communicative style in Japanese. In B.B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures* (pp.213-250). Cambridge : Cambridge University Press.
- Eisenberg, A.R. (1986). Teasing : Verbal play in two Mexicano homes. In B.B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures* (pp.182-198). Cambridge : Cambridge University Press.
- Ervin-Tripp, S. (1973). *Language acquisition and communicative choice*. Stanford, CA : Stanford University Press.
- Gleason, J.B. (1973). Code switching in children's language. In T.E. Moore (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*. New York : Academic Press.
- Gleason, J.B. (1975). Fathers and other strangers : Men's speech to young children. In D.P. Dato (Ed.), *Developmental Psycholinguistics: Theory and applications*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Gumperz, J.J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 井出祥子 (1992). 日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用. 月刊言語, 21, 12, 42-53.
- 栗山容子・井上淳子 (1997). 母親の入力方略と36ヶ月児の言語発達の特徴. 第3回 JCHAT Japanese CHILDES 研究会発表論文.
- 栗山容子・星三和子・蓮見元子・秦野悦子・瀬戸淳子 (1997). MLU にみられる個人差 : 縦断的と横断的データの分析から. 第3回 JCHAT Japanese CHILDES 研究会発表論文.
- Lyons, J. (1968). *Introduction to theoretical linguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Malone, M., & Guy, R. (1982). A comparison of mothers' and fathers' speech to their three year old sons. *Journal of Psycholinguistic Research*, 11, 599-608.
- Mannle, S., & Tomasello, M. (1987). Fathers, siblings, and the bridge hypothesis. In K.E. Nelson & A.van Kleeck (Eds.), *Children's Language*. Volume 6 (pp.23-41). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- 中野 茂 (1995). 幼児初期におけるメタコミュニケーションの発達過程 : 母親の遊戯的からかいへの応答を通して. 日本心理学会第59回大会発表論文集, 290.
- 小椋たみ子 (1997). 日本語獲得児の平均発話長算出の形態素区切りとサンプルサイズの問題. 第3回 JCHAT Japanese CHILDES 研究会発表論文.
- Oshima-Takane, Y., & MacWhinney, B. (1995). *CHILDES manual for Japanese*. Montreal :

McGill University.

Shatz, M., & Gelman, R. (1973). The development of communication skills: Modifications in the speech of young children as a function of the listener. *Monographs of the Society for Research in Child Development*.

Snow, C. E. (1977). The development of conversation between mothers and babies. *Journal of Child Language*, 4, 1-22.

綿巻 徹 (1997). 発話長の伸びと文法形態素の発達. 第3回 JCHAT Japanese CHILDES 研究会発表論文.

Warren-Leubecker, A, & Bohannon, J.N. (1989). Pragmatics: Language in social contexts. In J. B. Gleason (Ed.), *The development of language* (pp.327-368). Columbus, OH: Merrill Publishing Company.

Wertsch, J. V. (1991). *Voices of mind: Sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, MA: Harvard University Press.